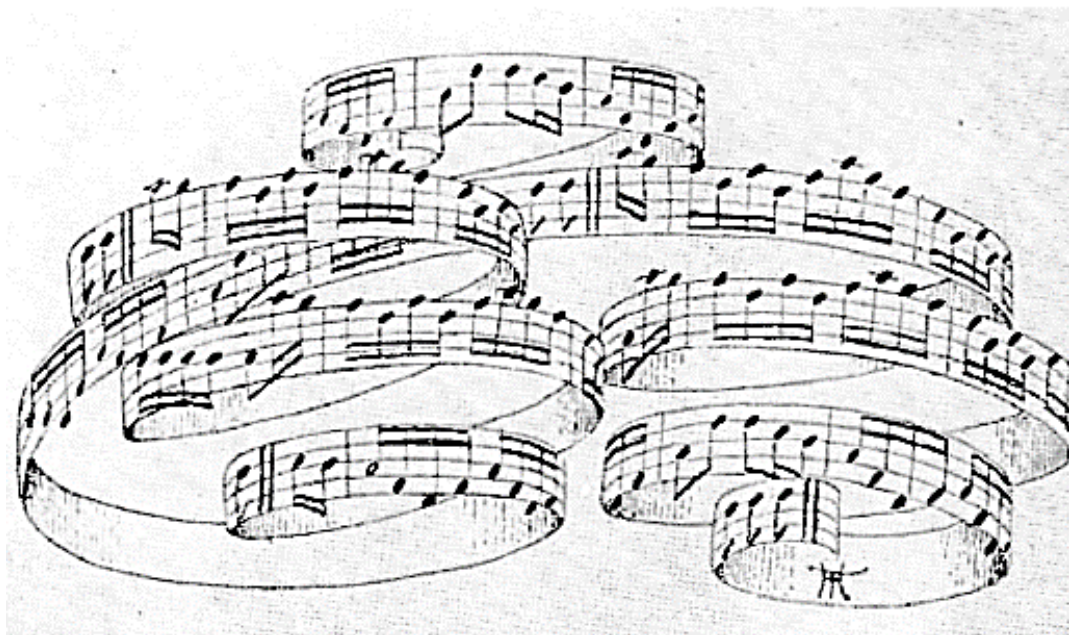


日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第 92 号 (2022 年 9 月 1 日号)

発行者 〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学経営学部高橋路子研究室内  
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com  
編集者 麻島徳子 〒533-0007 大阪市東淀川区相川 3-10-62 大阪成蹊短期大学



Hardy's drawing for 'The Dance at the Phoenix' in *Wessex Poems*. (提供：渡千鶴子氏)

## ベンジャミン・ブリテンとハーディ

永松京子

ハーディと音楽と言えば、彼が音楽好きであったことや自分の作品の中で音楽を効果的に使っていることがしばしば論じられる。だが、日本ではあまり関心と呼ばないが、彼の作品に触発されて様々な曲を作った作曲家たちがいるのである。20 世紀のイギリスの代表的な作曲家ベンジャミン・ブリテン(1913-1976)もそのひとりである。彼がハーディの詩に作曲した歌曲集 *Winter*

*Words: Lyrics and Ballads of Thomas Hardy* (1953)は、ハーディの作品に付けられた曲の中でも有名なものであるとともに、ブリテンの声楽曲の中でも傑作として知られている。彼はクリストファー・イシャーウッドやもう一人のイギリスの有名な作曲家グスターブ・ホルストの娘イモーゼンからハーディの詩集を贈られ、8つの詩を選んでこの歌曲集を作ったのだった。(歌曲集の名前は *Winter Words* であるが、8つの詩は詩集 *Winter Words* 以外からも選ばれている。)

実はこの歌曲集以外にも、ブリテンはハーディの作品に作曲した、あるいは作曲する可能性があった。1940年11月には彼が『霸王たち』に付けた音楽がラジオで放送された。この曲は好評であったらしいが、今は失われている。また、彼は『ラップ隊長』をオペラ化しようと考えていたが、残念ながら実現はしなかった。さらに惜しいことに、有名な映画『はるか群衆を離れて』(1967)を制作する際、監督ジョン・シュレジンジャーはこの映画の音楽の作曲をブリテンに依頼したが、他の仕事で忙しかったブリテンは引き受けなかった。しかし彼は依頼を断ったことを残念ながら、1965年にシュレジンジャー宛の手紙にこの小説について、“Knowing how I love Hardy, you will understand that there are few stories which I would have preferred to be connected with than this.” (Pettit, Charles. “A Shared Vision: Thomas Hardy and Benjamin Britten.” *The Thomas Hardy Journal* 31, 2015.)と書いている。

ブリテンはなぜハーディに惹かれたのか?上記の論文の中でペティットは彼らの人生にいくつかの類似があったからではないかと推測している。二人とも地方で生まれ育ち、若いころロンドンで暮らす、その後故郷に帰りそこを創作の場とした。ブリテンはロンドンの Royal College of Music で学び、20代ではアメリカやカナダで暮らす、故郷のサフォーク州オールドバラに帰り、多くの曲をそこで作った。また二人は若いころ信仰を失うが、ハーディが本能や情動の領域では churchy であったと自伝で述べているように、ブリテンもキリスト教に対してアンビバレントな態度をとり続けた。両者とも生前大家と目されたが、自分に対する批判に敏感であった。そして彼らには社会の中で疎外される者、犠牲になる者への同情や共感があった。テスやジュードのように、ブリテンは共同体の中で孤立する人物を主人公とするオペラをいくつか書いている。

2022年の冬から春にかけて、ロンドンではコロナの感染者は多かったものの、イギリス最高のオペラ劇場ロイヤル・オペラ・ハウスは通常通り開かれていた。そしてモーツァルトの『フィガロの結婚』、ヴェルディの『リゴレット』、プッチーニの『トスカ』といったスタンダードな作品と並んで、興味深いことにブリテンの『ピーター・グライムズ』が上演され公演は毎回ほとんど満員であった。『ピーター・グライムズ』はブリテンのオペラの中でも最も有名であり、イギリスを代表するオペラと言ってもよいだろう。気性は荒いが純粋な性格の漁師ピーター・グライムズが助手として使っている二人の少年を嵐や事故で死なせてしまうが、村人たちからは彼が殺したと思われる非難され、精神のバランスを失っていき、ついには一人でボートに乗り海へ出て死ぬことを選ぶというこのオペラは、なんとなく『キャスタブリッジの町長』と似ている。ピーターの感情の起伏の激しさ、強情さはヘンチャードを思い起こさせるし、村人たちに疎まれ、思いを寄せている女性ともすれ違いが起きて孤立を深め、自死するために海へ出て行くという彼の最後は、ヘンチャードの孤独死からそう遠くないように感じられる。このオペラは『キャスタブリッジの町長』と関係はないのだが、ブリテンなりの A Story of a Man of Character なのかもしれない。ロイヤル・オペラ・ハウスにおいて、『フィガロの結婚』の軽やかな響きとも、『リゴレット』

や『トスカ』の華麗な響きとも異なる渋くて重厚な『ピーター・グライムズ』の音楽を耳にしていると、ブリテンとハーディにはなにか通じ合うものがあるのではないかと思われた。

ブリテンの歌曲集 *Winter Words* は、現在でも演奏会で取り上げられたり CD が発売されたりしている。またブリテンより少し年上の著名なイギリスの作曲家であるグスタブ・ホルストは、日本では組曲『惑星』(1917)ばかりが有名だが、自分のベストの作品は『帰郷』を読んで作曲したオーケストラのための曲『エグドン・ヒース』(1927)だと述べている。ブリテンにしる、ホルストにしる、ハーディに関連する音楽が広く知られて、文学愛好家だけでなく音楽愛好家も彼の作品に関心を持ってくれることを願いたい。

## 《特別寄稿エッセイ》

# 門外漢によるハーディとのつきあい方の一例

柴田元幸

以下に書くのは、トマス・ハーディという作家は凄そうだからいずれきちんと読みたいと思いつつ、やはり凄そうなほかの多くの作家と同じく、ところどころで中途半端に関わりはするのだけれど、結局まだきちんと読むには至っていないが、読みたいと思う気持ちはまだある、というかむしろ強まっている……そういう中途半端な門外漢が、これまでハーディとどう関わってきたかの報告である。おそらく世界中ほとんどすべての人はそんな話聞く気がないだろうが、日本ハーディ協会の会員の皆さんだけは別かと思ひ、厚かましくも書かせていただく次第である。

1970年代なかば、アメリカ文学を専攻しようとしている学部生だったころ、Christopher Dolley, ed., *The Penguin Book of Short Stories* (1967)を読んだ。そのなかで特に面白かったのが、ディケンズの“The Signalman”, ジョイスの“The Dead”とあわせてハーディの“The Withered Arm”だった。まあ“The Dead”に関しては面白いと思う気持ちより敬意の方が優っていた気もするので、素直に面白い！という気持ちでいうと“The Signalman”と“The Withered Arm”が圧倒的だった。そのときそういう言葉にはしなかったけれど、どちらも、語り手もしくは視点的人物の内面(かどうかもよくわからないのだが)が他人の現実には及ぼす影響の描き方が絶妙だし、階級の問題が当初から物語世界に歪んだ磁力を行きわたらせているところが、アメリカ小説にはない要素として強い印象を残す——そのあたりが「面白い」の源泉だったのだと思う。

しばらくして *The Second Penguin Book of Short Stories* (1972)の“The Distracted Preacher”も読んだが、あいにくこっちはいまひとつピンとこなかった。ひとつには、重さ、暗さで読ませる“The Withered Arm”に条件づけられていたこともあり、もうひとつには単純に語学力不足も手伝って、牧師のどっぴさなどを源泉とする作品の滑稽さが全然見えなかったのだと思う。

それで何となく勢いを殺がれてしまい(いま思うと勿体なかった……)、しばらくハーディからは離れていたが、卒論指導などの必要もあってどこかの段階で *Tess* と *The Return of the Native* は読んだ。必要に駆られた、理想的とは言いがたいあわただしい読み方だったが、とにかく場所を書くのが巧い書き手だなと思った。特に、*The Return of the Native* のなかの Egdon Heath の描写。象徴的に意味づけしたりせず、人間社会と無関係にただあるものとして、自然を描く。アメリカの、た

たとえばホーソンだったら絶対に寓意を込めてしまうだろう（もちろんそれが魅力なのだが）ところで、そうせずに踏みとどまるのが凄いと思った（目下ゆっくり読み直している最中で、ますますそう思う。これ、ほんとに素晴らしい小説ですね）。*Tess* はテスがあまりに可哀想で読むのがちょっと辛いところもあったが（同じ理由でディケンズの *The Old Curiosity Shop* も読みとおせていない）、なんでもない農作業のシーンなどが素晴らしいと思った。

2010年代に入って、通勤途上にオーディオブックを聴くようになって、ハーディの短篇集も聴いてみたら、“Three Strangers”や“The Fiddler of the Reels”なども面白かったし（前者は新しい人物がまた一人現われるたびに生じる空気の変化、後者は音楽の使い方など）、“The Distracted Preacher”の苦めのユーモアも今度はある程度わかったが、やはり“The Withered Arm”が突出して力強いと思った。ちなみに“The Withered Arm”はその後、自分でやっている文芸誌 MONKEY（スイッチ・パブリッシング刊）のために自前の訳を作ることになり、素晴らしさを細部まで味わい尽くすことができた。邦題は「萎えた腕」。

そうこうするうちに、村上春樹さんと「村上柴田翻訳堂」なるものをやりはじめ、村上さんの提案で新潮文庫、河野一郎訳の『ハーディ短編集』を復刊させることになり（『呪われた腕 ハーディ傑作選』と改題）、二人の対談も巻末に載せた。まあ実はここで村上さんが言っている数々の鋭い指摘をご覧いただくのが最良である。たとえば自然の描写については、「ハーディは風景がまずあって、そのなかに人がいる。人が風景に負けているんですよね。負けているというか、組み込まれてしまっているというか。オースティンにしてもディケンズにしても人が立っている。キャラクターが立っていて、みんな自分を表出するんだけど、ハーディの描く人物は自分を表出しようなんて気がない。その辺がイギリス的だと思うし、はまっちゃうんだよね」。村上さんのハーディ談を聞いているうちに、「イギリス小説は描写で勝負し、アメリカ小説は声で勝負する」という、雑ではあるがけっこう当てはまることも多いと思うテーゼにこちらも行きつき、そのなかで、ハーディという人は思っていた以上に重要かも、という思いを強くした。

それと並行して、いろんなところで翻訳の朗読会をするようになって、朗読向きの短くて面白い作品を求めてあちこち探すようになり、ハーディの *Life's Little Ironies* の中の小品集“A Few Crusted Characters”に行きついた。いまでは“Old Andrey's Experience as a Musician”と“Absent-Mindedness in a Parish Choir”は朗読会の定番である。楽隊の連中の滑稽さ、その背後にある時の移ろいに対する淡い諦念、それが素晴らしくて何度読んでも飽きない。

去年から今年にかけて、研究社から『英文精読教室』と題した対訳アンソロジーを出し、“Old Andrey's Experience as a Musician”と“Absent-Mindedness in a Parish Choir”もその第6巻「ユーモアを味わう」に収録することにし、詳しく注釈をつけていくなかで、朗読する分には適当に片付けていた細部をもう少しきちんと考える必要に迫られた。それで、専門家の叢智を仰ごうと、麻島徳子さんにご教示いただき、その縁で、このような駄文を書かせていただいた次第。そうか、素人はこんなふうにはハーディに接しているのか、とほんの少しでも参考になることがあれば幸いである。おわかりのとおり、ハーディ長篇はまだほとんど未読、お恥ずかしい限りだが、それだけ老後の楽しみがたっぷりあるということでもある。

## ‘Cows swimming in the pool’.

### 深澤先生との思い出

上原早苗

深澤先生の大学院セミナーを受講し、直接先生のご指導を受けたことがあります。授業は毎回ハーディのテキストの語りをじっくり読み解くというスタイルで、私の心に強く残っています。先生は興味深いエピソードを多々お持ちでおられ、授業後に先生から幾つかお聞きしていますが、ここでは私にとって特に印象に残るエピソードを述べさせて頂き、深澤先生を偲びたく思います。

初めて深澤先生にお会いしたのは1988年8月で、当時私はケント大学に留学中の院生でした。指導教員のマイケル・アーウィン先生に、「せっかくイギリスにいるのだから Thomas Hardy Conference に参加してから帰国したらどうか」と勧められて学会に申込んだところ、日本からの参加者が数名おられ、そのうちのお一人が深澤先生でした。学会参加が初めての私は緊張していましたし、何よりも一人でしたから心細く思っていました。おそらく先生はそれを感じ取られたに違いありません、にこやかに話しかけてくださり、瞬く間に緊張から解放されたのを今でも鮮明に覚えています。日本の参加者は皆さん深澤先生を中心に纏まっておられ、学会期間中、何度かランチをご一緒させて頂きました。注文時にドーチェスター訛に苦勞する方もおられましたが、そんな時は決まって先生がさりげなく間に入られるのが印象的でした。ナッパーズ・マイトの中庭の席で、話が弾み、危うく午後のレクチャーに遅刻しそうになり慌てましたが、それも今となっては良い思い出です。

その後、ドーチェスターの学会で深澤先生とご一緒させて頂く機会に5、6回ほど恵まれました。先生は、研究者だけでなく地元のハーディ愛好者にも気さくに話しかけられて交流を深めていらっしゃるだったので、(下世話な言い方になりますが) 人気者でした。ですから、先生が学会に欠席されると大変で、「スグルは、どうしたんだ?」「途中から出席されるのか?」「プロフェッサー・フカサワは?まだ、お見えになってないようだが…」このような調子で、会う人会う人に質問攻めにあうのです。帰国後にそれを先生にお伝えすると、先生は、ちょっと恥ずかしそうな、ちょっと困ったような、お顔をされたものです。

「国際ハーディ協会副会長は名誉職だから、特に仕事はないんです」。深澤先生はよくそうおっしゃっていましたが、実際は、副会長として国際ハーディ協会と日本ハーディ協会を、また、イギリスの研究者と私たちの間を繋ぐことに腐心しておられ、先生のそうしたお姿を間近に拝見することがありました。国際ハーディ協会創設に先んじて日本ハーディ協会が設立されたのはイギリスでも有名で、ドーチェスターの学会期間中に何度かイギリスのメディアから取材が入りましたが、その度に先生はインタビューににこやかに対応しておられました。また、名古屋大学で2008年にローズマリ・モーガン教授、2010年にサイモン・ギャトレル教授を招聘して国際研究集会を開催した時は、名古屋までお越し下さり、懇親会にもお付き合いました。懇親会は沈黙が続くと気まずいもので、そうならないよう、ホスト役は緊張するものですが、先生はと

にかく話題が豊富で、話が途切れそうになると必ず話題を提供してくださるので、どんなに心強く感じられたことでしょうか。しかも先生には、素晴らしいユーモアのセンスがございました。モーガン教授とともにナゴヤキャッスルホテルのレストランで、しゃぶしゃぶを頂いた時のことです。これは美味しい、なんという料理か、とモーガン教授に問われると、先生はニッコリ微笑まれて、ひと言。‘Cows swimming in the pool’。大爆笑となったのは言うまでもありません。

深澤先生に初めてお目にかかってから、三十年あまりの歳月が流れました。今年の大会で、先生にもうお目にかかれなと思うと、とても残念ですが、今でも変わらず先生に見守って頂き、励まして頂いているような気がしてなりません。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 深澤先生の思い出

坂 田 薫 子

事務局より、学部生時代から深澤先生の指導を受ける機会に恵まれた会員の一人として、深澤先生との思い出のエピソードをいくつか紹介して欲しいという依頼を受けました。そこで、追悼の意を込めて、深澤先生の3つの思い出を紹介いたします。

まずは深澤先生との出会いについてです。私は厳密な意味では深澤先生の教え子ではないのですが、深澤先生は私の通う大学に非常勤講師としてお勤めになっていらっしゃったため、幸運なことに、私は学部の4年生の前期に、深澤先生のご担当されていた「小説演習」を受講する機会に恵まれました。今振り返ると、文学を教える教員の一人として、うらやましい限りなのですが、当時私の母校では、英語圏文学の「小説演習」のクラスは学生の人気が高く、毎年7つから9つものクラスが開講されていたにもかかわらず、受講希望者が多いと、初回の授業でくじ引きによる抽選が行われました。特に深澤先生の「小説演習」は毎年高い倍率で、高学年の学生を優先してくださったことで、私も4年生になってやっと深澤先生の授業を受講することが叶ったのでした。

そのとき読んだテキストは『緑樹の陰で』でした。受講生がテキストを音読し、日本語訳を発表した後で、深澤先生が文化的背景を解説される、いわゆる精読形式の授業でした。100年以上前の他国の田舎の風景描写や方言に富む会話の多い本作品の原文をこなれた日本語に訳すことは学部生には正直なところ非常に難しく、藤井繁先生の翻訳をそのまま読み上げる下級生もいましたが、当然気が付いていらっしゃったはずの深澤先生は、気が付いていない様子を装い、あの温かな笑みと口調で、ハーディ文学を解説してくださいました。当時学部生だった私が一体どこまで理解できていたのかは不明ですが、『ダーバヴィル家のテス』をテーマに卒論を書き始めていた私は、深澤先生の解説を一言も聞き逃すまいと拝聴したことを今でも懐かしく思い出します。

私はその後、大学院に進学し、大学院修了後間もなく、京都で専任職を得ました。就職してすぐに、当時の文部省からイギリスでの1年間の在外研修の機会をいただきました。その間にドーセットで開催される英国ハーディ協会のハーディ・コンフェレンスに参加したのですが、そこには深澤先生も参加されていました。ハーディ・カントリーを訪問するのが初めてであった私とは対照的に、コンフェレンスの常連でいらっしゃった深澤先生の周りには、常にイギリス内外の著名な研究者の先生方がお集まりになっていました。どなたも深澤先生に気が付くと、向こうから

話しかけられ、皆、深澤先生に敬意（リスペクト）を払って接していらっしゃいました。深澤先生は必要以上におしゃべりをする方ではありませんでしたが、会の運営から私生活の悩みまで、アドバイスを求められると、常に真摯な態度で回答されていたことを今でも昨日のことに覚えています。

最後に深澤先生とゆっくりとお話をする機会が持てたのは、丹治竜郎先生が主催されている中央大学人文科学研究所「短編小説の宇宙」研究会でのことです。この研究会は2018年に開始され、翌年まで何回か開催されたものの、残念ながら、その後コロナ禍により休会となってしまったままですが、深澤先生は、第2回の研究会で、NHKラジオの『原書で読む世界の名作』でのエピソードなどを交えながら、サキの短編「反安静療法」についての研究発表を行われ、他の回では、研究発表者の先生方に示唆に富むコメントをされていました。私も公務が重ならない限り参加させていただきましたので、手元には、学生時代に戻ったかのように、深澤先生のコメントの数々を書き取ったメモが残っています。おととしのハーディ協会大会でのズームでのご講演が、深澤先生のご発表を拝聴させていただき最後の機会となってしまったのが残念でなりません。まだまだ、もっとたくさんのご講演を拝聴させていただきたかったと願っているのは私だけではないでしょう。イギリス文学、そしてハーディ文学への深澤先生の思いを引き継ぎ、ハーディ協会の一員として、今後もイギリス文学研究、そしてハーディ研究を続けていきたいと考えています。

深澤先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 深澤俊先生のご逝去に寄せて

糸 多 郁 子

深澤俊先生は、日本ハーディ協会はもちろん日本の英文学界においても重鎮であられ、多くの業績を残されましたが、私にとっては尊敬する英文学者であると同時に、優しい父親のような存在でした。ですので、私は先生の素顔について書きたいと思います。

先生に初めてお目にかかったのは、私が津田塾大の大学院生の時です。私は大学院ではD. H. ロレンスを研究していましたが、学部の卒業論文はトマス・ハーディで書いたので、久しぶりにハーディの授業を受けようと英専協（大学院英文学専攻課程協議会）の冊子でハーディの授業を探しました。英専協に加盟している大学の大学院でなら授業を受けられるからです。そこで見つけたのが、立教大学大学院での深澤先生の授業でした。その時、無知な私は先生がどれだけ著名な先生であるかということも、実は中央大学の教授であることも知らなかったのです。授業では *Tess of the D'Urbervilles* とその評論をいくつか読みましたが、先生の幅広い教養に裏打ちされた講義は大変興味深く、大学院でもハーディを研究すればよかったのではと後悔したほどでした。一度、受講生全員と先生で、立教のレストランでランチをしたことがありました。最後に先生が全員分の支払いを负担なさろうとしたのですが、私たち受講生は固辞しました。すると先生が申し訳なさそうに「じゃ、せめて消費税分だけでも負担させてください」とおっしゃり、先生の優しさに感動したのが今でも良い思い出です。

その授業の終了後、再会したのは6年後、私が日本ハーディ協会の大会に初めて出た時です。私を覚えていらっしゃるだろうと思ひながら恐る恐るお話ししたところ、先生は「よく覚えていますよ」とおっしゃってくださり、それをきっかけに、翌年から中央大学で非常勤をすることになって、3年間毎週お会いすることになりました。

先生は、とにかく人間が好きな方でした。学者には人付き合いが苦手な方も多いですが、先生は多くの方と賑やかに過ごされるのが好きだったのです。私が非常勤で行っていた月曜の昼休みは、私を含む非常勤教員と専任教員総勢 10 名近くで一緒にランチを取る習慣があり、先生はいつもとても楽しそうでした。大学や学会等の人に関する話題が出るがよくありましたが、先生は多くの方についての様々な情報を実によく覚えていらっしゃるのです。抜群の記憶力のせいでもありませんが、やはり人間に興味がおありだったのでしょうか。そこは、ゴシップから発展した「小説」の研究者にふさわしい部分であったかもしれません。他の方々のもめごとの話題が出ても、先生は他人を悪様に言うことは決してなく、「困ったもんだね」と苦笑いなさるだけで常に紳士的でした。

また、先生はN響の解説を担当していたほどの音楽通で、音楽界にも放送界にも知られた存在であり、しかもパソコンも自分で組み立ててしまうほどのメカ好きでもありました。ハーディの大会の懇親会で、先生がみなさんをよくカメラで撮影なさっていたのをご記憶の方も多いと思います。大学や学会で様々な役職をこなされながらも、常に研究もなさっており、先生の能力の高さは驚異的でした。お父様を早くに亡くされて苦学した経験が生かされていたのかもしれませんが。

中央大学の非常勤をやめた後も研究会などでお会いする機会があり、私が他の学会のもめごとで悩んでいた時は心配してアドバイスをくださったり、2015年にハーディの大会でシンポジウムをした時も二つ返事で一緒に出てくださいたりなど、先生は常に応援してくださいました。が、私自身の能力不足で、大した研究業績も出せずに本当に期待はずれな弟子だったと思います。先生が偉大過ぎて甘えることに遠慮がありましたが、もっと積極的に先生にお話をうかがって指導していただくべきだった、と今は悔やまれてなりません。でも、先生は今でも見守ってくださっているだろうと思うので、今度こそ先生の弟子の名に恥じないような研究をしたいと考えています。

## 深澤 俊先生の思い出

佐野 立子

先生に初めてお目にかかったのは、先生の中央大学赴任が決まり既に中大に在職していた主人にご挨拶に見えられた時でした。

次にお目にかかったのは、鎌倉市民アカデミア第2期で「英国小説入門」という講座を先生がご担当されていた時です。先生はそこで長く講師をつとめられ、Hardy, Lawrence, Maugham など英文学本流の作家たちの作品を取り上げていらっしゃいました。私は長谷川欣佑先生夫人 槇子さんのご紹介で、途中からでしたが、その講座に参加することができました。私が参加した時はLawrenceでした。受講者の皆は一冊の本を通読するので充実感を感じ、また、その熱意に先生も応えてくださったのだと思います。物腰が実に丁寧で、静かで、威圧感のない語り口に私達は魅



了され、感激いたしておりました。受講者の一人が「まさに英国紳士だわ」と言っていたのが印象に残っております。

深澤先生との距離が近くなったのはイギリスでの Hardy 生誕 150 年の記念大会です。大会に先立ってロンドンの Westminster 寺院で Hardy のお墓に花輪をささげるという行事があり、そのころ在外研究で York 大学におりました主人が先生の代理で参列させていただきました。そんなこともあり私たち家族も 7 月に主人とロンドンで合流すると、先生のご厚意で Dorchester で開かれていた大会に参加する事ができました。そんなある日、主人が姉娘を迎えにロンドンに行って留守の時、先生がお昼をご一緒しましょうと誘って下さいました。先生が連れて行って下さったのは Dorchester の本通りの中腹からやや下ったところにある Mousetrap というレストランでした。先生は「ここはなかなか良いレストランで味もなかなかなんですよ」とおっしゃっていました。お店は大変混んでおりました。3 人で楽しくお食事した後、お支払いの時に先生が卓上にそれは沢山のコインの山を築かれたのには本当にびっくりしました。

翌朝、主人と姉娘が無事に合流して、いよいよ本大会のハイライトであるツアーが始まりました。このツアーは先生が懇意にしている旅行社 Wessex Heritage が用意したもので、Dorchester 周辺の Hardy ゆかりの地を巡った後、Stonehenge を経て Austen が晩年を過ごした Chawton Cottage に至るといふ壮大なものでした。しかも、宿泊は Bishopstrow House という貴族の館で、その調度品には目を見張るものがありました。あの頃は Stonehenge の巨石群になんなく近づくことができました。ここにたどり着いた Tess はどんなおもいであったかとしばし感慨にふけりました。

姉娘が帰国した後、先生は私たち 3 人を Wales 北岸の旅に連れて行って下さいました。日頃慎ましい先生がイタリアの高級車 FIAT をレンタルされたのには驚きました。Manchester 経由で一路 Wales にむかい、海沿いの港町 Conway の旧市街地にあるホテルに泊まることになりました。先生が交渉して男性と女性に分かれ 2 泊の宿泊を取り付けました。ところが翌朝先生から昨夜は鷗がうるさくて眠れなかったのので今夜は一人部屋にしたいとの申し出があり、私たち母娘はパパの軒のせいだと大いに納得しました。その日はホテルの裏手の川向こうにある Conway 城を見学に行きました。海岸に沿って屹立する素晴らしいお城でしたが、残念なことに修理中ということで中には入れませんでした。その後は Caernarvon Castle、Chester、Worcester 近辺の作曲家 Elgar の生家、Lyme Regis などに立ち寄った後、ロンドンにもどりました。

私と娘は主人より一足先に帰国するので見納めに National Gallery に行くと、そこでばったり深澤先生とお会いしたのです。先生はニコリと微笑み Ritz Hotel の High tea に誘って下さいました。「前から Ritz Hotel で High tea をいただきたいと思っていたのですが、一人だと入りにくくて。お会いできて良かったですよ！」と嬉しそうに話されたのが印象に残っています。そうした取り留めのないお話のうち、たまたまピアノリスト青柳いづみこさんが話題になり、私が女子大時代の恩師のお嬢さんで幼いころからよく存じ上げていると申し上げると、それでは今度ぜひリサイタルにご一緒しましょうということになりました。

しかしその約束が果たされたのは、20 数年後のことでした。場所は朝日ホール、曲目はドビュッシーの前奏曲集全曲でした。「沈める寺」はことに力演で、感動した主人と私がいづみこさんにご挨拶に伺うと、先生はその様子をカメラに収め、翌日に私のパソコンに送って下さいました。

こうして今振り返ると私たち家族は先生のお世話になりっぱなしだったと思います。それだけに先生の早い旅立ちはとてつらいことでした。心よりご冥福をお祈り致します。

## 深澤俊先生と映画

今 村 紅 子

1998年10月24日から11月8日にかけて、東京の渋谷東急、Bunkamura、そして渋谷公会堂で、英国映画祭実行委員会主催、英国大使館後援による「英国映画祭(British Film Festival)」(第11回東京国際映画祭 協賛企画/英国祭 UK98 正式参加)が開催されました。『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*, 1997)、『フランケンシュタインの逆襲』(*The Curse of Frankenstein*, 1957)、『Queen Victoria 至上の恋』(*Mrs. Brown*, 1997)、『トム・ジョーンズの華麗な冒険』(*Tom Jones*, 1963)、『トレインスポッティング』(*Trainspotting*, 1996)、マイケル・パウエルの『赤い靴』(*The Red Shoes*, 1948)と、時代を超えたさまざまな英国映画、約31篇ほどが一挙に公開されました。そのなかに、トマス・ハーディの『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895)を映画化した、マイケル・ウィンターボトム監督による『日陰のふたり』(*Jude*, 1996)がありました。

深澤俊先生とは映画の話をさせていただいたことが思い出されます。とりわけ、英国人監督のウィンターボトムによるハーディ小説の映画化についての話がよく話題にあがりました。ウィンターボトムは、ボスニア紛争やグアンタナモ米軍基地などを取り上げた映画監督として知られていますが、一方で現代ロンドンに生きる市井の人びとを描く『ひかりのまち』(*Wonderland*, 1999)のように心の機微を描くことにも優れた監督です。

『日陰のふたり』では、スーの生きざまが快活に美しく描かれ、それを見守る生真面目なジュードの姿がアルバムをめくるようにイングランドの光景の中に映し出されていました。小説では都会的で精神的に自立した「新しい女」だったスーの姿が、映画ではどちらかというジュードと同じくらいに世間知らずで、うぶな女性として、そしてジュードのよき理解者として描かれています。だからこそ、初々しく仲睦まじい二人の前に立ちはだかる社会の因習や慣習が、より大きな問題として観客には印象的に映ると深澤先生は分析されていました。リトル・ジュード(原作のリトル・ファーザー・タイム)が、ジュードとスーの二人の乳幼児を道づれにした事件により、小説内のスーはジュードから離れて社会的因習のなかに取り込まれ、ジュードは生きる意味を見失います。しかし、映画のラストシーンのジュードは観客に向かって、スーとの P.B. シェリーの精神的な本当の結びつきの意味を語りかけるのです。深澤先生はこの語りを「社会のモラルのなかで不幸な結末を迎えたにしても独自の意味を失ってはいない人生の本質」と述べていました(「ジュードの時代」『CINEMA SQUARE MAGAZINE No. 139 「日陰のふたり」』、シネマスクエアとうきゅう、1997年)。

ウィンターボトムは『カスターブリッジの市長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)の舞台をイングランドから、ゴールドラッシュの頃のカリフォルニアの山中へと移して『めぐり逢う大地』(*The Claim*, 2000)として映画化しました。原作の忠実な映画化を期待すれば不満が出かねない舞台設定ですが、現代の映像作家であるウィンターボトムにとっては、ハーディの描く厳しい自然との闘いや運命のいたずらは、カリフォルニアの雪山でこそ描き切れたのだろうと深澤先生はお

考えでした。近代化の波に適應できない、不器用で正直な主人公マイケル・ヘンチャードの気高さを、ウィンターボトムはダニエル・ディロンという町の支配者の姿を借りて、現代的に映像化しました。ディロンには、ヘンチャードに通じる支配者の威厳があり、金塊への執着とは比べ物にならない娘に対する深い愛情がありました。ヘンチャード同様、ディロンは感情的ですが生命力あふれる好人物でした。深澤先生が指摘されたように、この作品は小説そのものの映画化ではなく「小説から得たインスピレーションの映画化」として成功しているのです（「ハーディからウィンターボトムへ」『CINEMA SQUARE MAGAZINE No. 180 「めぐり逢う大地」』、松竹株式会社事業部、2002年）。かつてロマン・ポランスキーの『テス』（*Tess*, 1979）でヒロインを演じたナスターシャ・キンスキーは、『めぐり逢う大地』では主人公の妻として出演していました。深澤先生がそのことをうれしそうに話されていたことが、懐かしく思い出されます。

今回、深澤先生のお仕事やご功績を次世代に伝えたい思いから、先生とお付き合いのあった方々にそれぞれの貴重な思い出を『ハーディ研究』と「日本ハーディ協会ニュース」にご執筆いただきました。日本ハーディ協会での深澤先生のお姿や学問に対する真摯な姿勢、やさしいお人柄、これまでの軌跡が記されています。ご執筆いただいた皆様に心より御礼申し上げます。ご交友関係が多岐にわたった深澤先生です。先生との特別な思い出やエピソードをお持ちの方は「日本ハーディ協会ニュース」にご投稿をいただけますと幸いです。深澤俊先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 《シンポジウム予告》

### ハーディと進化論

#### ——実りある研究にむけて——

はじめに

清宮倫子

進化論とはなんぞや？と問われて、すぐ答を出せる人はおそらく皆無に近いであろう。英語でいえば、progress とか evolution となるが、これは Darwin より Herbert Spencer が好んで使った用語で、Darwin は、transformation とか mutation という用語を使った。Hardy は、19歳の時、『種の起源』の出版を「拍手をもって迎えた」と伝記に記しているが、「衝撃を受けた」とは記していないことに注意が必要である。Addison 氏が指摘しているように、この時すでに、様々な「進化論」がヴィクトリア朝文化の根底に存在していたのである。さらに、ドイツやフランスやアメリカにも浸透していたことが知られている。

今日、「進化論」を Darwin が代表しているのは、20世紀に入ってから自然科学、特に分子生物学の急激な発達により、彼の「進化論」の「自然選択」説の価値が証明されたからにはほかならない。すなわち、20世紀に入ってからメンデルの再発見までは、Darwin の進化論は、様々な「進化

論」のなかで決して優位をしめてはいなかった。当時、英国で最も影響力のあった進化論者は Darwin ではなく Spencer であった。Spencer は総合的な進化哲学を構築することに腐心したので、「進化論」を科学思想として認知する現代においては、自然科学と人文科学の混同あるいは、無理な結合をしたい加減な思想家として、急速に軽視されるに至った。

しかし、Hardy を文化的文脈において理解しようとする場合、問題にすべきは、当時の「進化論」でなくてはならない。ヴィクトリア朝時代の「進化論」は、確実な成果を約束するきわめて厚みのある豊かな言説である。まず、ここを立脚点にすることが肝要である。

## ハーバート・スペンサーの進化社会理論と政治思想

藤 田 祐

ヴィクトリア時代にイギリスだけでなく世界中で大きな存在感を示したハーバート・スペンサーは、20 世紀に入ると急速に影が薄くなり、典型的な社会ダーウィニズムを唱えたという位置づけのみが独り歩きして記憶されることになった。スペンサー思想を「社会ダーウィニズム」と片付けるのは一面的であるが、様々な学問を統合しようとした「総合哲学」は、どのような切り取り方をしても断片的な理解に留まりかねない。本報告では、初期スペンサー思想、多層的な進化理論、『人間対国家』(1884)の政治思想に焦点を合わせてスペンサー思想を理解する鍵を提供したいと考えている。

事実上最初の著書となる『社会静学』(1851)では、人間を社会化する進歩の必然性が強調され、完全な人間性を想定した理想社会における規範が探究されている。理神論の神に支えられた理想社会論という初期スペンサーを特徴づける要素に加えて、後期スペンサー思想の萌芽も見られる。古典のリベラリズムを支える「平等な自由の法」と社会進化論、〈キャラクター〉決定論と社会有機体論、文明と野蛮の区別と不適者に対する冷酷な態度などである。

その後スペンサーは、『社会静学』の進合理神論を後景に退かせる代わりに、当時最先端の学問で自らの体系を支えようとし、様々な学問を横断する「総合哲学体系」を構築していく。「総合哲学体系」を支える「科学」の中心を占めていたのが進化理論である。ただし、スペンサーの進化理論は、生物進化理論に留まらない複層性をもつ。まず「不明瞭なまとまりのない同質性から区分の明瞭なまとまりをもった異質性へ」という全宇宙を貫く普遍進化の原理があり、次に「社会に適用した生物進化論」と「社会有機体の進化理論」という二つの意味での社会進化論がある。前者の社会進化は、ラマルクとダーウィンの進化メカニズムを通じた環境との相互作用による〈キャラクター〉(性格・品性・形質)の進化であり、後者の社会進化は、社会有機体を構成する要素が特殊化・専門化しながら相互依存を強める過程である。このような二種類の社会進化をマクロな宇宙進化におけるミクロな側面とするのがスペンサーの進化理論である。

1880 年代になるとスペンサーは、第二次グラッドストーン内閣における国家の社会に対する介入策を批判する「個人主義」と呼ばれた潮流を代表する思想家とみなされるようになる。ここでの「個人主義」とは、国家による社会改革を主張する「集団主義」を批判し、個人の自由を最大化するために国家の役割を削減することを主張する思想潮流である。国家と個人を対立させる「個人主義」の考え方は、スペンサーが同時代の自由党政権を批判した論考のタイトルである『人間対国家』に象徴されている。総合雑誌に投稿された四本の論考からなる『人間対国家』は、軍事社会から産

業社会へという社会進化論、(キャラクター) 決定論、公的救貧批判、自然法思想というスペンサー思想を特徴づける要素を根拠にして国家の権限拡大を批判した時事評論である。

以上の三点を鍵にしてスペンサー思想の特質を明らかにしたい。

## Hardy and Darwin Among the Poets

Neil Addison

Over the last few decades, since Gillian Beer's *Darwin's Plots* (1983), Thomas Hardy's fiction has increasingly been discussed in relation to *On the Origin of Species* (1859) by Charles Darwin. Hardy himself wrote that his work displayed 'harmony of view with Darwin' (*Collected Letters: VI* 259). His poetic response to Darwin, however, can be fruitfully explicated by placing it in context alongside the body of nineteenth-century verse that reacted to changing evolutionary thought. Robert Chambers' *Vestiges of the Natural History of Creation* (1844) was a significant text that introduced evolutionary ideas to Victorian public awareness. This drew upon the notion proposed by Jean-Baptiste Lamarck, who argued that organisms changed in order to adapt to their environment, and that those changes were then passed on to further offspring. Alfred Lord Tennyson, in *In Memoriam A. H. H.* (1850), was cautiously receptive of *Vestiges*, expressing sentiments that echoed a Lamarckian notion of the great chain of being, imploring Man to 'Move upward, working out the beast, | And let the ape and tiger die' (Canto 118 27-8). Later, the publication of Darwin's *Origin* (1859) provoked a more pessimistic series of poetic responses to the issues addressed by his theory of natural selection. Ideas discussed in Robert Browning's 'Caliban Upon Setebos' (1864) and Herman Melville's *Clarel* (1876), for example, can be directly traced to Darwin's theory. In the somewhat uncertain Epilogue of *Clarel*, Melville asks 'If Luther's day expand to Darwin's year, | Shall that exclude the hope - foreclose the fear?' (1-2).

Hardy's poetry was not Lamarckian, and, although affected by the implications of Darwin's theory, can also be differentiated from such poets who responded to Darwinian ideas. While he read Tennyson and Browning, he was particularly inspired by earlier Romantics such as William Wordsworth, and John Keats. Wordsworth's celebration of ordinary stoicism and perseverance, such as in 'Resolution and Independence' (1807), greatly appealed to Hardy as he faced a harsh and competitive Darwinian world. Further, Keats' 'Fancy' (1820) appeared to influence the ways in which Hardy's poems display moments of imaginative wonder, even in the face of a secular Darwinian reality. His poetic *oeuvre* thus evidences a number of brighter examples alongside more pessimistic pieces, demonstrating the combined influence of both Darwinian theory and the poetic arts upon his verse.

Hardy's poetic reaction to Darwin's *Origin* can be separated into several general types. A number of his poems are more directly pessimistic, such as 'The Ivy-

Wife' (*Wessex Poems* 1898), and 'In a Wood' (1898), appearing to show natural competition and degeneration. Other pieces draw upon Darwinian imagery to stress the importance of sympathy and 'loving kindness'. Hardy's 'The Wind Blew Words' (*Moments of Vision* 1917) references the more negative aspects of Darwin's *Origin*, but also signposts, along with 'Compassion: An Ode' (*Human Shows* 1925), the implications of Darwin's theory for animal and human kinship. Elsewhere, several of Hardy's poems imagine a hopeful human and species endurance. In 'Heredit' (1917), the poetic speaker takes the form of a family gene which will endure across the generations despite the death of each individual. The speaker tells us, 'I am the family face; Flesh perishes, I live on,' (1-2). Furthermore, in poems such as 'In Time of "The Breaking of Nations"' (1917) and 'Proud Songsters' (*Winter Words* 1928), life continually revivifies. In the former poem, old ploughmen, horses and country lovers endure as idealised rural forms, while the singing birds in the latter poem are imagined springing almost magically into existence from 'particles of grain, | And earth, and air, and rain.' (11-12). In his brighter poems, Hardy's speaker draws wonder and imaginative hope from life's continual endurance.

## ダーウィン『人間の由来』と小説家ハーディの終焉

清宮倫子

Darwin は、『種の起源』出版の12年後に『人間の由来』(1871)を出版した。この書物は『種の起源』で論じられていたあまたの生物を支配する最適者生存の法則が人間にもあてはまり、他の動物と人間が連続していることを論証しようとしたものである。そこで、「性選択」という雌を獲得せんとしてする雄同士の闘争を通して勝った個体は選択され、その性質は遺伝するとし、さらに人間の場合、「美德」というものを社会的本能として遺伝的性質と認めた。これは、『種の起源』に含意されていた、個体として生き残るためには利己を利他に優先させなくてはならないという、Spencer が主張した議論と齟齬をきたしている。小説家 Hardy が最後にこだわったのはこの点である。

同時代に活躍した Emile Zola も Henry James も同じ文化的文脈にあったが、「美德」を前面に出して描くことはしなかった。それは作品全体から自然に立ち上がるものであるとした。いわば、「進化論」の対極にあるキリスト教に距離をとったのである。一方、Hardy は、lovingkindness という言葉を頻繁に用いて、キリスト教道徳との接触をはかった。ここにヴィクトリア朝小説家としての Hardy 文学の特質がある。

以上の観点から、『恋の霊』(*The Well-Beloved*)を中心に論じて、小説家としての Hardy が筆を折った内的原因をさぐるのを本発表の目的とする。

『恋の霊』は、連載版と一巻本の2版あり、それらが『ジュード』の出版を挟んでいることはよく知られている。連載版では主人公ピアストンは、アヴィシー3世との結婚を果たしながら、彼女が恋人を忘れられないのを見かねて自殺をはかる。ここで扱われている結婚問題は、『ジュード』で再び社会の中における恋愛と結婚として扱われ、王道をいくヴィクトリア朝小説として完成した。ところが Hardy は、その後一巻本として『恋の霊』を著し、「ある気質のスケッチ」と副題をつけ

て、「ファンタジーあるいはロマンス」として出版し、その中で性欲に焦点をあて、恋愛と結婚を切り離した。

Darwin の「進化論」は生き残る者を特定する議論である。生物として生き残るとは再生産を果たす、すなわち性交により子を得るということである。そのためには性欲という遺伝的形質が最も重要である。「欲情をそそる」、「性的に露骨」などの理由で、主な出版社から『テス』の出版を断られて苦難を強いられてもなお、性愛の追究に突き進んだ Hardy は、一方でキリスト教道徳すなわち「黄金律」への執着も捨てられなかった。性愛の追究は、結婚のなかに性を隠蔽してきたヴィクトリア朝小説そのものの成立を困難にしている。ここに小説家としての Hardy のジレンマがあるとして、彼の小説の断筆の内的動機を探る。

## 《特別講演予告》

### 世紀末のコテッジと農村共同体

#### ー トマス・ハーディ小説における建築表象

大石和欣

建築家としての専門的訓練を受け、優れた才能も備えていたトマス・ハーディの小説には、さまざまな建築物が描かれている。『日陰者ジュード』におけるクライストミンスターの建築群やジュードが補修する地方の中世教会は好例であろう。後年「古建築物保存協会」にも所属することになったハーディは機能性を持ったゴシック様式を評価する傾向があり、そうした趣味は小説のあちこちに表出している。対照的に『ダーバヴィル家のテス』における成金者アレック・ダーバヴィルの実家や愛妾としたテスとともに住む家は、モダンな様式として描いている。

しかしながら、ハーディの小説群において頻出しかつ最重要な建築物は、ごく平凡で日常的なコテッジではないだろうか。農業に従事する人びとやジュードのような職人が、日々の労働からの避難地として朝夜を過ごし、生活の瑣末事に追われ、家庭内の喜びと同時に悩みを抱え、時に軋轢と亀裂さえ経験するトポスがコテッジである。建築様式としては単純な構造であるコテッジは、建築史においても注目されることがなく、ハーディの建築に関する知識や技術に着目する研究でも看過されがちである。だが、農村共同体の根幹を支える単位としての家族や個人を規定し、存立させる空間としてコテッジは無視できない。時にはコテッジが村落共同体の命運を象徴する場合もある。とりわけ 19 世紀末のイギリス農業は、地域差はありながらも自由貿易を通じた安価な米国産の肉や穀物の輸入により多大な影響を被り、疲弊と衰退の途にあった。その中であって農村共同体はそれまで以上に流動的になり、結果としてコテッジもまた住人が入れ替わったり、補修を施され、時には解体さえも経ていった。

本講演では、ハーディのそうしたコテッジ表象を、『ロングマン・マガジン』に寄稿した「ドーセット州の労働者」を参照しながら、同時代におけるコテッジの歴史的状況に照らし合わせながら考察していく。まず初期の小説である『はるか群衆を離れて』や『帰郷』に描かれているコテッジ

や農家屋を、実存的な意味を備えつつもナイーヴな建築空間表象として読み解く。その上で後期の小説、とりわけ『ダーバヴィル家のテス』において、コテッジが単に実存在的なだけではなく、農村共同体自体の変容や衰退をも示唆し、さらにはハーディの思想そのものを反映する空間として表象されていることを示したい。ハーディが同時代の思想と呼応しているのであれば、フランスの社会学者ピエール・ブルデューが社会制度を通して構造化されていく文化的産物を呼称した「ハビトゥス」の一例として、ハーディのコテッジ表象を捉えることもできる。つまり、ハーディ小説に描かれたコテッジは、「牧歌」あるいはレイモンド・ウィリアムズの言う「反牧歌」の象徴であるだけでなく、イギリス 19 世紀末思想の中で胚胎された建築空間ということになりえる。

### 《編集後記》

日本ハーディ協会ニュース第 92 号では、2022 年 2 月にご逝去された深澤俊先生の追悼文を多数ご寄稿頂きました。ご執筆下さった先生方、また追悼文のお取りまとめをして下さった今村紅子先生に、心よりお礼申し上げます。深澤先生は、1994 年から 2002 年まで 4 期にわたり日本ハーディ協会会長を務められました。会長職にとどまらず、日本ハーディ協会を長きにわたり支えておられました。追悼文では、協会会長としてのお姿のみならず、公私にわたる様々な深澤先生の表情をうかがうことができます。日本ハーディ協会の大会で、会場の前の方の席に座られて、時折カメラを構えながら、いつも穏やかな表情で研究発表を静かに聞いておられた深澤先生の横顔が思い出されます。深澤先生のご冥福をお祈り致します。

また、今号では特別寄稿エッセイとして、東京大学名誉教授で翻訳家としてもご活躍されておられる柴田元幸先生にご寄稿頂きました。大学院生のとき、集中講義に来られた柴田先生のお授業を受講したご縁で、この度機会に恵まれ、厚かましくもご寄稿を依頼したところご快諾頂きました。ご寄稿文のなかでも言及されておられましたが、2022 年 6 月に刊行された柴田先生の『英語精読教室シリーズ第 6 巻 ユーモアを味わう』（研究社）には、ハーディの短編 “Old Andrey’s Experience as a Musician/ Absent-Mindedness in a Parish Choir” (1894) のご翻訳が収録されています。どんな内容の短編だったかな、と気になった方はこれを機に是非。

ご多忙の中玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。また、第 89 号より 2 年にわたって編集を担当するにあたり、編集作業のマニュアルをご作成くださり、扉図版のアイデアを多数ご提供くださった渡千鶴子先生を筆頭に、多岐にわたってご助言、ご協力くださった先生方々に、改めて心より御礼申し上げます。

次号は 2023 年 4 月発行予定で、原稿の締め切りは 2023 年 2 月 10 日です。論文、随筆は 2,000 字程度、短信、個人消息は 500 字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。

---

日本ハーディ協会ニュース 第 92 号

HP 公開日 2022 年 9 月 1 日

編集者 麻島 徳子

---